

「心の病気」というセンシティブな授業内容を踏まえた上で、「わせポチ」やCourse N@viのベストな活用法を検討



西多 昌規
スポーツ科学学術院 准教授

スポーツ科学部の選択科目「スポーツ精神医学」では、スポーツに関わる精神疾患など「心の問題」を多く扱う。西多昌規准教授は、スマートフォンなどのITツールに親和性の高い今の学生たちに向けて、「わせポチ」をはじめ授業内でも積極的にITツールを活用している。と同時に、授業内容がセンシティブであることを意識して、設問やフィードバックを行う際には十分に心を配るようにしている。

徐々に下がる「わせポチ」の参加率、学生メリットを強調することで改善

「スポーツ精神医学」は2017年度に開講した科目で、初年度から西多准教授が担当している。受講人数は100名程度とかなり多く、授業は基本的に講義スタイルで進めている。現状は、グループ討論などは取り入れていないが、その理由は「大人数」というだけではなく、授業の内容がスポーツに関連した「心の病気」——たとえばうつ病や摂食障害、ADHD（注意欠如・多動症）などの発達障害を解説するものだからだ。

西多准教授によると、この科目に受講する学生の中には、自分自身あるいは周囲の人が病気の当事者であるケースが少なくないという。「授業内容自体に侵襲的な部分があり、たとえば学生の体験など生の声を聞こうとするとプライバシーの侵害にもなりかねません」。また、ある程度以上の基礎知識がなければ、グループで討論しても有益な話し合いができないという問題もある。

とはいえ、何らかのインタラクティブな取り組みはしていきたい。そこで、西多准教授が初年度に導入したのが、Web版のクリッカー「わせポチ」だった。試合などで移動する機会が多いスポーツ科学部の学生のスマートフォン保有率はほぼ100%で、導入に際しては特に問題はなかったという。しかし、初年度は前半の5回ほどしか「わせポチ」を使用しなかったそうだ。最初は8割程度の学生が回答したものの、だんだん参加率が落ちてしまったためだ。

「最終的には、回答者は授業の出席者の5割以下になりました。もの珍しさから最初は参加しても、回を重ねると飽きてしまったようです」。どうすれば「わせポチ」への参加率を上げられるのか。もちろん、プライバシーには十分に配慮した質問内容が求められる。「学生の関心を引くために、興味本位の質問になるようなことは避けなければいけません」。考えた結果、西多准教授は2年目となる2018年度は、「答えることで学生にメリットがあるかどうか」という観点を特に意識するようにした。

「具体的には、授業レベルの把握を『わせポチ』利用の主な目的としました。『質問の答えに応じて今日の講義のレベルを調節します』と説明すると、自分たちの意思決定が授業内容に反映され

ることから、多くの学生が参加するようになりました」。

仮にうつ病が授業のテーマであれば、「①よく知っていて説明できる」「②ある程度は知っている」「③名前だけは知っている」「④まったく知らない」というように4～5段階で答えさせて、答えに応じて実際に授業内容を調節した。

「知識レベルの把握には、『わせポチ』は非常に便利なツールです。教員はどうしても『これくらいは知っているはず』と思いがちですが、実際にはそうではないことがほとんどです」。

もう一つ、「わせポチ」の役割として、授業の中盤で「活を入れる」効果も挙げられるという。「動画を見せることなどにも同様の効果がありますが、45～50分ほど経って少し中だるみになったときに、『わせポチ』を挟むと学生がアクティブになって教室の空気が変わります。もちろん、授業の後半で話す内容のレベル把握にも役立ちます」。

ほかにも学生の意向を聞くときに使うなど「学生にメリットのある使い方」を明確にしたことで、2018年度はほとんどの回で、「わせポチ」を活用できたと西多准教授は語る。今後は、「わせポチ」を出席管理に利用することも検討しているという。「『わせポチ』の回答をもって出席とすれば参加率が上がることはわかっていますが、答えたらそこで集中力が切れてしまっただけは困ります。ただ、試してみる価値はあると思うので、次年度は毎回ではなく、たまに出席管理を絡めた形で『わせポチ』を使うことも考えていますね」。

スマホでも見やすい資料を作成してCourse N@vi上でのみ配布する

西多准教授は、Course N@viも積極的に活用している。早稲田大学で教えることになってから、Course N@viを徹底的に研究したそうだ。「学生が予想以上にCourse N@viを使っていることもわかったので、活用しないのはもったいないと考えました」。まず、授業の資料は数日前にCourse N@viにアップする。紙の資料は一切配布しない。

「学生に聞いたら、紙があれば便利だがなくても困らないということでした。紙資源の節約の面からも、この方法でよいと考えて

います。ワシントン大学のFD（ファカルティ・デベロップメント）研修に参加した際も、どの授業を見学しても資料は紙では配布せず、学生はパソコンやタブレットなどで見ていました。それが主流になっていけば、その流れに合わせるのがよいのではないのでしょうか」。

学生の中には、ダウンロードした資料をプリントアウトせずにそのまま画面で見る者も少なくない。特に、スポーツ科学部生の場合は、スマートフォンで見ていた学生が多いため、資料を作成する際には文字の大きさや構成要素を工夫しているという。

「スマホの画面は小さいので、見やすさを優先して文字は大きめに、イラストなどは排除して極力シンプルに作っています」。

一方、授業中にスクリーンに表示するものに関して、基本的な内容は同じだが、イラストを使ったり動画を挟み込んだりして、見えて飽きない工夫を施す。「事前配布と授業で使う資料に差があることは、授業に出席するインセンティブにもなると考えます」。

また、出席もQRコードとCourse N@viで管理している。具体的には一人ひとり異なるQRコードを記載したカードを渡して、それをスマホのカメラで読み込むとCourse N@viに登録される。

「QRコードの有効期限は1限（9～10時半）の間だけです。一度、QRコードの期限を一週間ほどに設定したところ、友人の分まで持って行った学生がいたため、現在は授業時間中のみとして学生にはすぐに登録するように伝えています」。

授業内では触れにくい個人的な内容は「レビューシート」で伝えてもらう

さらに、Course N@viでは「レビューシート」の機能も活用している。前述のとおり、「わせポチ」では匿名であったとしても立ち上がったことは聞きづらいし、もちろん授業中にプライバシーにかかわるような質問をしたり話を聞いたりということもない。しかし、学生によっては、まさに授業で取り上げているような「心の病気」に関わる質問などをしたいというニーズもある。

「そうしたさまざまな質問や授業の感想などは、Course N@viのレビューシートに書いてもらっています。レビューシートには締

め切りは設けず、提出義務もありません。授業の評価として必須ではありませんが、テストやその他の評価がぎりぎりの場合は、レビューシートの提出も考慮すると学生たちには伝えています」

レビューシートの利用は全体の1～2割というところだという。多くの声を拾うなら、授業終了時にリアクションペーパーを配布して感想を書かせるという方法もあるが、西多准教授は、フィードバックのしやすさと「形式的ではない学生の声」を聞くには、Course N@viのレビューシートのほうが適していると感じている。

「レビューシートにより質問が来て、次の授業で紹介したいと思うこともあります。ただ、たとえ匿名にしてもやはり内容的に紹介することは難しいので、レビューシートは直接授業に活用することはありませんし、今後もする予定はありません」。

次年度以降に関しては、「難しいですが、やはりSlackなど議論しやすいSNSを活用した学生同士のディスカッションなども検討していきたいですね」と西多准教授。SNSを介することで、口下手の学生でも参加しやすくなるというメリットが期待できる。「まだ検討段階ですが、たとえば心の病気そのものではなく『障がい者スポーツは今後どうあるべきか』などをテーマに設定して、自分たちで情報などを調べた上で議論するというのなら、可能性はあるのではないかと考えています」。